

博士学位請求論文

漢語アクセントの史的形成についての研究（概要）

加藤大鶴

本研究の目的と構成

本研究は、外国語としての発音が志向される字音の原音声調が、日本語のアクセント体系に融和し、漢語アクセントを形成するまでを捉えることを目的とする。ここでいう漢語は借用語であるから、まず外国語が日本語に取り込まれていくプロセスを考えなければならない。その上で漢語アクセントの形成を考えるということになる。

本研究では音調を分析の対象とするが、その表示方法である声点の認定が分析の第一歩となる。また音調を記述し、その体系性と史的变化を明らかにしていくためには、資料に記された声点がいかなる字音系統に基いており、その字音系統のなかでいかなる音調を反映したものを認定しなければならない。さらに、認定した声点がどのような位相において実現したかを知る上では、その声点が差声者の発音に基づいて差されたものか、字音学習・伝承の一環として典拠に基づいて差されたものかを見定めておくことが重要である。第1章「1.1 声点の認定とそのデータ化に関わる問題」では、字音声点の認定に関わる問題、漢音と呉音の認定に関わる問題を明らかにするとともに、それをデータ化する上での方法に触れる。また漢文訓読資料に声点や字音注記を加えるのは、直接的には漢文のテキスト読解のためであったことを踏まえる必要がある。「1.2 字音注記とその出典に関わる問題—『医心方』を中心に」では、漢文訓読資料である『医心方』を用いて、字音声点の加點目的、字音学習の際に声点と反切がどのように関わったのか、反切の出典がどのように選ばれたのかといった問題を取り上げ考察する。

第2章では原音（中国語）の声調体系に基づく調値を、借用音として受け止めた日本語がどのように継承し、あるいは変容させていったかについて資料をもとに分析する。取り扱う文献資料は漢文訓読資料の『医心方』、和化漢文訓読資料の『新猿楽記』諸本・『尾張国郡司百姓等解文』諸本、和漢混淆文資料の『宝物集』諸本、『延慶本平家物語』である。これらは正格漢文をもとにした規範性の高い字音直読資料や訓読資料に比べれば位相的には低く位置づけられる。そのため規範の影響を強く受けず、逆に日本語としての発音が志向されることが推測できる。原音声調が日本語音韻体系のなかでどのように継承され、変容するかを探るためには、こうした理由でこれらの資料は適しているといえる。「2.1 原音声調の継承と変容の一形態—音調のグループ化と多様化」では多様な音調が一つの型に収斂する様子と、それとは逆にある音調型が多様化する様子とを描く。「2.2 漢語の声点に反映した原音声調の継承と変容」では、和化漢文訓読資料と和漢混淆文資料に現れる音調の具体相を分析する。

第3章ではこうした資料に現れた漢語声点から探ることができる原音声調の継承と変容の具体相から、漢語アクセントが形成されるプロセスを考察する。特に「3.1 字音声調から漢語アクセントへ」では曲調音節に着目し、その音調上の特徴が日本語のアクセント体系のなかに継承される際に考えておくべき問題点について考える。また「3.2 アクセント体系変化前後に見る漢語アクセントの対応」では、漢語声点から知られる音調を体系性を有する漢語アクセントとして捉えるために、南北朝時代に生じたアクセントの体系変化後の資料から知られる漢語のアクセント型と、原音声調の組合せから推定される音調型との間に、体系変化前の声調型から推定される「アクセント型」を置いて、三者の関係を比較対照し、その整合性を見ていく。

第1章 字音声点を分析する上での基礎的問題

資料から漢語アクセントを記述し、その体系性と史的变化を明らかにしていくためには、資料に記された声点がいかなる字音系統に基いており、その字音系統のなかでいかなる音調を反映したものを認定する必要がある。さらに、声点の差声者が字音系統をどのように認識したかについて知っておくことで、認定の保証とすることもできる。また、認定した声点がどのような位相において実現したかを知る上では、その声点が差声者の発音に基づいて差されたものか、字音学習・伝承の一環として典拠に基づいて差されたものかを見定めておくことが重要であり、そのためには差声者が持つ字音についての知識についても考えておかねばならない。このことは、ひいては資料から推定される声調・アクセントを漢語の音韻史を考える材料として用いてよいか考える上でも、踏まえておくべき問題である。本章ではこうした問題について、平安・院政期書写の訓点資料『医心方』諸本を資料として、次の3節で考える。

第1節では「声点の認定とデータ化に関わる問題と方法」について論じる。まず、「1.1.1 字音『来源情報』と声点の認定」では、字音系統の認定の大きな根拠となり得る「来源情報」についてその概略と利用上の限界について触れた。漢音系字音では切韻系韻書の『大宋重修広韻』と『韻鏡』に拠ることが基本であるが、本論ではそれらがデータ化されている「電子広韻」を基本とし、それを拡充することで分析に用いている。呉音系字音は漢音系字音以前の、複層にわたる字音体系を総括的に示す用語であり、ある特定の時代や地域の中国語音を母体音に措定することはできないとされる。そのため原理的にひとつの「来源情報」を措定することはできない。そこで、「対象とする時代以前に存在する呉音系字音を反映する資料」の一群を定め、それらを便宜的に「来源情報」とする方法を取った。ただし、この方法であっても、参照した呉音系字音資料自体が持つ複層性の問題を免れ得ない。そこで「1.1.3 漢音と呉音の認定に関わる問題」では、漢音系字音「ではない」ことを基準として得られた字音を呉音系字音と認定することができるかについて検討する。呉音系字音の特徴として、去声字のふるまいがその環境によって異なる（語頭環境か非語頭環境か、1音節字か2音節字か、接続する字の声調は何か）ことが知られるが、そうした去声字のふるまいにおける特徴から、この基準で得られた語群に字音系統を推定できるかを述べた。

また、「来源情報」を用いることで、漢字の周囲に付けられた点の物理的位置情報と調値とを対照させて声点を認定していく際に、六声体系と四声体系とで特に〈東〉〈平〉の認め方が異なることや、移点時において移点者の字音知識の有無や声点体系の違いによって、資料ごとに個別的な判断が必要になることを「1.1.2 声点と声調の対応—軽点の認定に与える字体特徴の影響」に述べた。なかでも、軽点が移点者に理解される際に、字体や字形の影響を受けたのかについては、考えおくべき重要な問題である。移点資料『半井家本医心方』に現れる〈平〉と〈東〉のうち、高さの基準となるパーツを持つ「左下隅に払いを持つ字」と、高さの基準がなく相対的な高さの違いしか表すことができない「左下隅に縦棒を持つ字」とを区別し、〈東〉と〈平〉の現れ方を分析したところ、前者に〈東〉が多く残存する傾向があることが分かった。

第2節では、「依拠出典と字音注記の問題」について論じる。漢文訓読資料において認定された声点は、広い意味で字音学習・伝承の一環として差声されていることは、疑いを入れないと言えるだろう。したがってその声点から推定される声調やアクセントをただちに漢語の音韻史を考える材料として用いてよいわけではなく、まずはテキストの読解に用いられた事実を踏まえる必要がある。「1.2.1 字音声点の加点目的」では(1)反切によって示された字音からさらに声点によって声調を明示する例、(2)声点によって漢字が持つ複数の意味を限定する例、(3)声点によって漢字が文脈上自立語であることを示す例、(4)声点によって字音系統を明示する例、についてそれぞれ分析を加え、資料から得られる知見の限界を見定める。「1.2.2 字音注記の出典と加

点方針』では、医学書という特性を持つ『医心方』において先行文献から字音注記等を引用する際に、『本草和名』を重視したことを具体的に探る。また『本草和名』に字音注がない場合に、『和名抄』等を利用したことを指摘し、さらに『本草和名』と『和名抄』の字音注が異なっており、どちらから引用するか選択可能である場合、引用者の字音知識がどのように関与したのかを明らかにする。さらに「1.2.3 玉篇・切韻系韻書を典拠とする反切注文」では、半井家本の移点祖本である宇治本において、玉篇や切韻系韻書が利用されていたことを具体例に掲げながら明らかにするとともに、移点段階で玉篇諸本では新しい『大広益会玉篇』や、切韻系韻書では新しい『大宋重修広韻』が、それぞれ用いられていることを明らかにした。また移点時に新たに反切が加えられる際に、当該字の調値は必ずしも考慮されるわけではないことを推定した。

第2章 原音声調の継承と変容

本章では原音（中国語）の声調体系に基づく調類の区別を、借用音として受け止めた日本語がどのように継承し、あるいは変容させていったかについて資料をもとに分析する。分析に際しての基本的な考え方は、原音の声調体系としての規範性を持った「字音」と、日本語の音韻体系・拍構造に基づく「語音」と2つのレベルを設ける。実際にはこの2つのレベルは截然と分かれたるものではなく、両レベルの混ざり合う領域が、個々の資料における位相的性質等によって個別的な特徴やその特徴の多寡として現れてくる。本章で取り扱う文献資料は国書とはいえ漢文訓読資料の『医心方』、和化漢文訓読資料の『新猿楽記』諸本・『尾張国郡司百姓等解文』諸本、和漢混淆文の『宝物集』諸本『延慶本平家物語』であって、正格漢文をもとにした規範性の高い字音直読資料や訓読資料に比べれば位相的には低く、「字音」と「語音」の両特徴を観察するには適していると言える。これらの資料に現れる、「字音」と「語音」に相渡る視点から得られる諸特徴の解釈には、原理的には、(1) 字音学習の弛緩を要因とする個別的・臨時的な誤りと、(2) 一定の条件のもとで語音として獲得された新たな姿と、両様あるに違いない。本章においても、この両様が観察されることになるが、なかでも(2)に分析の焦点を絞り、「字音」が規範性を失い「語音」として新たな姿を獲得しながら日本語に融和していこうとする、その一過程を考察する。

第1節では原音声調の継承と変容の一形態として、「音調のグループ化と多様化」について論じる。すなわち声調が日本語の音韻体系に融和するに際して、意味に対応してある音調型に収斂する動きと、逆に学習の弛緩によって多様な型に拡散する動きと、両様を明らかにする。まず「2.1.1 音調のグループ化」では、『半井家本医心方』の呉音系字音に基づく漢語のうち、植物に関する語に《去上》型が多いことを指摘した。これは呉音系字音の声調体系自体が持つ数的偏在を反映したものではなく、字音が語音化する過程で生じたものと考えられる。また日常的な漢語とされる「俗音等注記語」や和訓と同じレベルで捉えられている漢語への声点にも、《去上》型と推定できる例が多い。こうした例の分析から、音調のグループ化は少なくとも12世紀以前に生じ固定化していたことを推定した。

次に「2.1.2 中世和化漢文資料に現れる漢語声点の揺れ」では、『新猿楽記』の（書承関係のない）3つの写本を用いて、(1) 写本を異にする同語に差された声点には三者の関係が全く整合的に説明できないものと、(2) 同一のもの、(3) さらには異なりながらも一定の範囲で整合的に説明できるものがあることが分かった。(3)について具体的に述べれば、まず低起上昇型間で異なる形で現れるもの、すなわち《去上》（上昇調＋高平調）型と《平上》（低平調＋高平調）型での揺れとして現れる例が挙げられる。この他、2字3拍の漢語よりも2字4拍の漢語のほうに、3本で音調型が安定しない傾向があり、拍数が長くなれば伝承の規範性が弛緩しやすいことを推定した。

第2節では和化漢文訓読資料と和漢混淆文資料に現れる漢語の声点を対象として、原音声調の継承と変容の

具体相を探っていく。「2.2.1『尾張国郡司百姓等解文』における字音声点」では、『尾張国郡司百姓等解文』の漢語に差された声点を分析するに先立って、声点の現す音調の体系、濁声点から知られる中世に独特な濁音形、漢音と呉音の比率、漢呉音混読例の比率などを分析する。その上で、「2.2.2『尾張国郡司百姓等解文』における漢語の声点」では、二字漢語に差された声点からその語レベルでの音調型を明らかにする。ほぼ半数程度の比率で現れた漢音漢語と呉音漢語は、まずはそのことによって和化漢文訓読資料的な様相を見せる。さらに分析結果からは、原音声調を継承しつつも、一語としてのまとまりを形成するために高さの山が2つに分かれることを回避する、「中低形の回避現象」が観察された。特に漢音において、《去・去》、《上・去》の接続では後項の《去》が低平化し、《去平》型・《上平》型で安定することが見て取れた。

2.2.3以降では、和漢混淆文資料に現れる漢語声点を分析する。「2.2.3『宝物集』における漢語の声点―語彙的に継承される漢音・呉音声調」では、今度は和漢混淆文を資料として漢語に差された声点を分析する。ここでは、固有名詞のうち地名、人名などに着目し、それらが中国や印度に由来を持つものは漢籍類を経由して日本に入ってきているために漢音で読まれる傾向があり、仏典類を経由して日本に入ってきているものは呉音で読まれる傾向にあることを確認した。またその中でも2.2.2と同様に、漢音の中低形回避が見られた。「2.2.4『延慶本平家物語』における漢語の声点」では、まず和語の声点について分析を行い、資料の時代的位置を行った。その上で、二字漢語に差された声点を分析した結果、和化漢文訓読資料や他の和漢混淆文と類似した傾向が見て取れた。

なお、第2節では原音声調が継承され変容する具体相を見るが、その中で同時に原音声調とは整合的説明のつかない声点を観察することもできた。それら声点は、資料間で一致せず異なった姿を取り散発的で離散的な動きをするものも多いが、なかには資料間で同一の声点やその組合せを見せるものも確認された。それらもまた、原音声調を継承し変容させていく語群とともに、漢語アクセントが形成されゆく一端をになっているものと思われる。

第3章 漢語アクセントの形成

前章において、「字音」が規範性を失い「語音」として新たな姿を獲得しながら日本語に融和していこうとする、その具体相を文献資料から観察した。観察の結果、伝統的な字音声調を、漢字に差された声点との対応において捉えたとき、その多くは伝統を継承しながらも、時に漢字の接続のなかで変容し、あるいは伝統性から切り離され新たな音調として現れもすることが見て取れた。本章では、こうした音調の具体相を、体系性を有する漢語アクセントとして捉え、その史的变化を概略的に記述することを目指す。

第1章では、第2章に先立って、前章以前に観察してきた資料を振り返りながら、字音声調の持つ音調上の特徴が日本語のアクセント体系のなかに継承される際に考えておくべき問題点について述べる。ここで取り扱うのは主として「曲調音節」と呼ばれる、下降調と上昇調である。「3.1.1 下降調と下降拍」では、平声軽音節の音調が、和語における下降拍と同様の高降りとして実現した、と一律にみなすことについて、疑義を呈する。『半井家本医心方』では、和語の下降拍に〈東〉と〈上〉が差される一方で、字音平声軽音節には〈東〉と〈平〉が差される傾向がある。また先行研究に基づき、現代の漢語アクセント型について方言間の対応を見ていくと、和語アクセント型の類別に似た対応が全体として得られるのに対して、平声軽音節を由来に持つ漢語(1拍語と2拍語)では対応が認めにくい。これは平声軽音節が漢音の母胎音においては「低い下降」として実現し、下降拍のような「高い下降」とは異なる音調であったことに基づくのではないかと推論した。この推論から、漢語アクセント体系を考える際に、平声軽音節をただちに下降拍に置き換えず判断を保留したところもある。

「3.1.2 去声字の低起性実現から考える漢語アクセントの形成プロセス」では、漢字2字の組み合わせからなる漢語がアクセント型を形成するに際し、それが漢字2字からなる声調型を形成してから漢語アクセントとなるのか、漢字1字ずつの音調が拍として開かれた後で複合し漢語アクセントとなるのか、という問題を扱う。この問題を考える上で『新猿楽記』諸本を資料として、《去・去》という単字の連続が一語となるにあたって《去上》となる場合と、《去平》となる場合とに着目し、それが漢語アクセントの形成プロセスの違いに基づくのではないかと考えた。その結果、(1) 語頭環境の《去》は漢音漢語では呉音漢語に比べて低起性が保持される傾向がある(2) 語頭2拍環境の《去》は低起性が保たれやすいが、呉音漢語のみ高平化する例がある(3) 非語頭環境の《去》は漢音漢語では呉音漢語に比べて低起性が明瞭に保持される(4) 中低形の回避では漢音漢語では後項の《去》を低平化するが、呉音漢語では高平化する、との事実を得た。この4点はいずれも漢音漢語が呉音漢語に比べて去声字の低起性を実現しやすいことを示しており、それは漢音では単字についての分析的な観察が先立ち、これを複合させることで漢語アクセントが形成されたことによると推論した。

以上を踏まえ、第2章において取り上げてきた和化漢文訓読資料、和漢混淆文資料を中心としたアクセントの体系変化以前の漢語声点を、漢語アクセントとして捉えることを試みる。そのため、これらの漢語声点を、南北朝時代に生じたアクセントの体系変化後の資料から知られる漢語のアクセント型と比較する。これまでも、体系変化後の資料に現れる漢語のアクセント型を、原音声調と対応させ、伝統性の度合いを測る試みはあった。本研究では、その中間に和化漢文訓読資料と和漢混淆文資料の漢語声点を配置し、一方では原音声調からの伝統性を探り、もう一方では体系変化後の資料に現れる漢語のアクセント型との対応を探る。その上で、体系変化前における漢語のアクセント型を推定する手続きを取る。すなわちこの手続きは、通史的な流れのなかにここまで見てきた漢語声点を置き、その継承と変容を素描するということでもある。例えば、漢音漢語における《去・去》の連続が《去平》となる現象や、また低起上昇型間で揺れが見られる(同語に《去上》《平上》が現れる)現象、あるいは原音声調からは全く説明のつかない調値の組合せが、ある時代や資料にのみその傾向が確認されるものの、その後の時代にまで持ち越されない「そだたなかった変化」なのか、そうでないのかという問題も通史的な流れのなかで説明できる。こうした問題を「3.2.1 漢字2字3拍の漢語アクセント」「3.2.2 漢字2字2拍・4拍の漢語アクセント」にて具体例に基づきながら考察する。